

SINAPIS



社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol.
76

2022.9

年間テーマ ～ 互いに耳を傾けよう ～



地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪大司教区

社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203

Email/sinapis@osaka.catholic.jp

ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

今月のテーマ

「いのちのまなざし」

タイトル:

「生命のはじまり」

提供: サレジオンシスターズ修学院

みんな昔は胎児でした

医療法人ガラシア会
常務理事・チャプレン 松本 信愛

「人のいのちの大切さ」に関しては、ほとんど議論の余地さえないように感じるが多々あります。たとえば、新型コロナウイルスから高齢者を守る姿勢や、行方不明になった一人の子どもを探すために大勢の捜索隊を結成して必死で探す姿など、いのちの大切さと素晴らしさを実感させてくれます。

しかし、「胎児のいのち」に関しては、人によってその捉え方がずいぶんと異なっています。その原因の一つに、胎児のいのちの素晴らしさの「実感」がないからかと思われます。妊娠を喜んで、その胎児への愛情を実感しているお母さんが、その胎児を死産した時の悲しみよりは、1歳の赤ちゃんを失ったときと全く同じように感じられます。しかし、他方、思いがけない妊娠の場合、その胎児のいのちを取ることに賛同してしまうことが可能であるという現実があります。

まだ「感情的」に愛情や素晴らしさを実感できない胎児の場合は、人間の持っているもう一つの能力である「理性」によって、その大切さと素晴らしさを実感する必要があります。

今生きている私たちが存在するためには両親がいました。もちろんその両親にも両親がいました。2代前（祖父母の代）で4人、その上の代が8人・・・こうして遡っていくと、10代前には1024人の先祖がいたことになります。その中の一人でも、子どもの時に、事故か病気で亡くなっていたら、今の自分はいないわけです。今生きている人は誰でも、すごいいのちを繋げてきたのだということを実感できます。

また、今、自分の体重が生まれたときの20倍になっているとしても、生まれたときの自分は人間として20分の1の人間だったのではなく、100%「一人の人間」でした。誕生直後の自分と、1日前の母親のお腹の中にいた胎児は「全く同じ自分」でした。生まれる直前の胎児と数カ月前の胎児も「同じ自分」でした。こうして考えると、人のいのちの始まる受精卵から高齢に至るまで、「大切な同じ一人のいのち」であるということに疑いを挟むことはできないはずです。

ニュースレター 目次

- 1 巻頭言
- 2 特集<経口中絶薬承認に反対する署名に対する反響を受けて>
- 11 子どもの本で平和をつくる⑤
- 12 子どもたちに伝えたい平和
- 13 障がい者委員会より
- 15 時報9月号より
- 17 死刑廃止セミナー報告
- 18 大阪入管面会支援ボランティア報告
- 19 ホームだより
- 21 祈りのつどい報告
- 22 ガリラヤの風
- 23 みんなのけいじばん
- 25 あとがき

チラシ・ご案内

- ・シナピスの風
- ・9月の祈り
- ・忘れないあきらめないカレンダー
- ・「被造物を大切に作る世界祈願日」教皇メッセージ
- ・「世界難民移住移動者の日」教皇メッセージ
- ・「世界難民移住異動者の日」委員会メッセージ
- ・憲法改悪を許さない全国署名
- ・全国難民弁護団集团的難民認定に対するコメント
- ・日韓和解と平和プラットフォーム共同声明
- ・カトリック中央協議会 HIV/AIDS デスク勉強会
- ・ピース9お年玉付き年賀はがき注文書
- ・日本カトリック正義と平和ブックレット注文書
- ・とめよう改憲！デモ案内
- ・映画のご案内

年間テーマ

～互いに耳を傾けよう～

これは教皇フランシスコが数々のメッセージの中で、私たちに何度も呼びかけていることばです。身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。この言葉を受け、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。このニュースが皆さまと一っしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

シナピスニュース 7月号同封

「経口中絶薬承認に反対する署名用紙」に対する 反響を受けて

社会活動センター・シナピス
センター長 松浦 謙まつうら けん

7月のシナピスニュースに「経口中絶薬承認に反対する署名」用紙を同封したところ、読者からさまざまな意見のメールをいただき、反響の大きさに驚きました。

経口中絶薬を服用すれば、胎児の生命が奪われます。生まれてくる赤ちゃんのいのちは守らねばなりません。また母体に対して深刻な影響を及ぼす可能性があるとも言われます。この意味で署名活動の目的自体は、正当なものと考えました。

ですが、同時に、わたしたちは、現実の社会の中で生きる「人」を大切にしなければなりません。女性が子どもを産みたくても産めない社会環境があります。また性暴力を受けたり、男性の側の責任は問われないまま孤立し、妊娠した女性もいます。このような苦境の中で悩む人たちの立場を十分理解し、助け、支援し、寄り添うことが求められます。

この度、投稿して下さった方たちのおかげで、これらの問題について改めて考える機会が与えられたといえます。ニュースレターはこれからも、皆さんの忌憚のない意見を活発に出し合える場にしていきたいと思えます。今回の投稿内容と、スタッフの考えも合わせて皆様を紹介いたしますのでご一読ください。



寄せられたご意見



●K.F

すべての命を大切にするという視点から、母体、胎児の命を守ることは大事なことです。ただ、この署名の呼びかけを、誰が見るかということを考えられたかどうか、不安になりました。例えば性暴力にあってやむなく中絶をせざるを得ない人にも、子どもを育てよと言えるのかどうか。薬のことを訴えながら、女性に対して中絶をするのは良くないと訴えているように聞こえたのです。それはマザーテレサの言葉を使っていることに表れていると思います。「母が子を殺す」という表現など。教えとしては罪です。ただ一方でその状況に追い込まれた人に対してどう向き合うかということも、命を大切にすることには含まれると思います。

そして、子どもの父親もいるはずで、この薬の使用のためには配偶者の同意も必要と聞いています。男性の責任も述べるべきでしょう。性暴力によって妊娠をしてしまう人もいますので、どうしたらなくなるかということも並行して訴えていく必要があると思います。

薬の安全性については、実際に使用されている国もあるので、危険な薬と言い切れるのかどうか、よくわかりません。

この署名は外部の団体のものを使用されているようなので、シナピスからの呼びかけとして説明があるとより趣旨を理解しやすかったかもしれません。

●山下和実（鹿児島教区紫原教会信徒）

毎月の発行ご苦労様です。毎月貴重な情報を提供していただき感謝しています。7月号に同封された「経口避妊薬反対」の署名に関しての感想を述べます。署名用紙の紹介者がシナピスになっていることから、わたしはシナピスは、経口中絶薬承認に反対する立場で行なっているものと理解しました。それは、シナピスの判断ですから自由ですが、この問題は人工妊娠中絶そのものをどのように考え、これに対してどのような立場を取るのかにつながります。この経口中絶薬承認に反対するチラシを読む限り、そこがはっきりしません。反対の理由として4点あげていますが、中絶反対とは明言されていないからです。しかし、提唱者は反対の立場だろうと推測します。

アメリカでは、プロ・ライフとプロ・チョイスに割れて、政党間・宗教間の対立になっています。わたしは、この二分法で、人工妊娠中絶の是非を論じることには、疑問を感じています。日本のカトリックにおいても意見が割れるでしょう。チラシには、学者のコメント、2枚の写真、マザーテレサのことが引用されています。これだけで中絶反対の理由にするのは、無理ではないでしょうか。きちんとした議論が必要で、日本カトリック司教団は「いのちへのまなざし」（2017年）で、人工妊娠中絶の問題を簡潔に取り上げています。これを参考にして分かち合うことも可能です。

この問題に関しては、丁寧な議論が必要です。特に、今回の署名運動に疑問を感じる方がいるはずで、シナピスには、両方の立場から意見を聞いて、対話を促進して、それを公表してほしいと思います。

この署名運動に関連して鹿児島教区の事情を説明します。

6月下旬に、教区報7月号「司教の手紙」の中で、司教さんから「プロライフ運動」への協力が呼びかけられました。その中に「生命尊重センター」の紹介がありました。妊娠中絶反対を推進している団体です。そのニュースレターには、特定の思想傾向があると、わたしは思っています。その後、鹿児島教区の司祭会議で「経口中絶薬」承認反対のチラシ・署名用紙が配付されました。7月上旬には、主任司祭を通して小教区で紹介されています。こちらは、司教さんが提唱されているので、シナピスの場合とは異なります。司教さんが提唱することに対して、教区内で疑問を感じている信徒・司祭が少なからずいるのです。しかし、司教に異論を唱えることは難しいので「対話」は成立しません。わたしの小教区では、ミサ後の祈りとして、シナピスから毎月送られてくるカードを使っています。シナピスの情報にはお世話になっていることを感謝しています。猛暑とコロナ禍のなか、編集部の皆さま、お身体を大切になさってください。

●M.N

胎児の命を守る大切な活動と思いますが経口中絶薬承認に伴い厚生労働省が「服用に、原則配偶者の同意が必要」という見解を示した事に対して片や国際セーフアポーション RHR リテラシー研究所のように中絶の配偶者同意撤廃を求め活動しているグループがあります。望まぬ妊娠をしてしまった女性を守る事はどういう事でしょうか？ いろんな視点が必要ですね。署名を断られて私も学ばせてもらいました。8月号シナピスレターの最後のページを読んでメールしました。

エンブリオの活動は大切ですがシナピスは私達に望んでいない妊娠をさせられた女性、正しい性教育を受けられない子どもたちに向き合える視点を投げかけて欲しいです。これからもよろしく願います

知り合いからシナピスが配布したという「経口中絶薬反対署名」を読み驚愕し、違和感だけでは表現できない何かを感じたので、その気持ちをお伝えしたくメールいたしました。

私は（教皇フランシスコが警戒する）「フェミニスト」ですが、同時に10代の頃洗礼を受けた「カトリック信徒」でもあります。今回はカトリック信徒の立場からしても、違和感を禁じ得ない意見としてこのメールを書こうと思います。

そもそも最初の違和感はこの署名には「今必要なのはすぐに中絶することではなく、妊婦への相談と支援です」とありますが、それは別に「経口中絶薬」があろうとなかろうとやるべきことです。しかもそれは「今」などと強調する話でもなく、ずっとやっていかなければいけないことです。もっと言えば「中絶」VS「相談と支援」と対立させるのは実際の相談者やサポートを受ける側の思いを大事にすることではなくカトリック教会の教えを押し付ける、あるいはカトリック教会の教えが求める方向に誘導していきはしないかと危惧します。

そしてこの署名で最も違和感があるのは妊娠に関する重要なファクターである男性が見事に消え去っている点です。そもそも中絶に至るプロセスにはその女性と性行為をした男性が関わっているはずなのに、その男性の存在が見事に消え去り「胎児」とその胎児を妊娠した「女性」だけがクローズアップされています。これは実に奇妙なことではないでしょうか。そして妊娠には当然性暴力により懐妊する場合があります。しかしこの署名は男性の存在も性暴力の存在も綺麗に消し去った書き方になっています。

カトリック教会は長年男性聖職者（主に司祭）による子どもや女性への性虐待や性暴力が横行しており、また教会組織もそれを知りながら隠蔽してきたことが次々と明らかになっています。この教会の隠蔽と今回の署名には二つに共通項が見て取れます。すなわち妊娠に関する男性の存在、とりわけ性暴力を犯した男性を都合よく消し去り、性暴力をなかったことにする点です。

「中絶反対」は「自殺反対」と並んでカトリック教会が、長年掲げてきたスローガンでした。しかし自殺に対して「死にたいというほどの悩みを持つ人々に痛みを寄り添い、その悩みを少しでも分かち合うことのできる教会共同体になりたいと願っている」と「いのちへのまなざし」【増補新版】には書かれています。中絶に対しては「どうしたら中絶をなくすことができるのか、女性を取り巻く環境について具体的に考え行動していくことも大切です」（同掲書）とありますが、この「具体的に考え行動していく」ことの中には妊娠に関わる男性の問題、性暴力の問題が入るはずですが。

「妊娠に関わる男性」「性暴力」のファクター抜きに考え、行動することなどできようもありません。そして「妊娠に関わる男性」「性暴力」の問題から目を背け隠蔽してきたカトリック教会が抜け抜けと「授かるいのち 未来に繋ごう」などと表明するのはグロテスクでさえあります。

●無記名

貴団体の署名運動について疑問があります。受胎した時から生命尊厳が生じる事は解ります。しかし、原理主義的な教義解釈のみで、胎児の人権のみを擁護することは母親の妊娠後の生命尊厳を無視した状態だと思います。

以下が判断のポイントです。

女性は妊娠出産で死ぬリスクがあります。

例えば、出産時赤ちゃんの汗や排泄物が母体内に入って死ぬこともあります。

眠れない・食事がとれない等々母体の健康リスクは想像よりも高いです。

現代の医療を持ってしてもリスクは高いです。

妊娠出産をする母親の命を尊重して居られるのでしょうか？

日本で子どもを成人まで育てるには、一人あたり 3000 万円かかります。

貧しい現代日本では、共働き夫婦でも金銭的ハードルにより子どもを諦める方々が、信仰の如何を問わずにおられます。そのことをご存じですか？

妊娠の原因となる男性は、日本法規では一切責任を問われません。

止む無く女性のみで出産した場合、自分の生活費・一人あたり 3000 万円の養育費を稼ぐには、健康で安全で道徳的な職種でほぼ無理です。

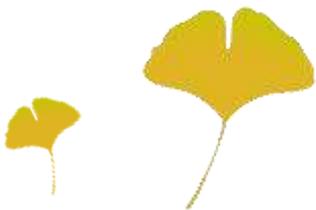
出産するために母親は仕事すら選べなくなります。

母親が仕事すら選択出来ない状況は、母親の人権を命として尊重出来ている状態でしょうか？

多くの先行研究があるように貧困と教育到達・躰け度には相関性があります。

日本のような貧困社会で、安全な家庭・教育環境が整えられないまま子どもが成長する場合、子どもの将来が狭められ自由に生きることが難しくなる事は子どもの人権を命として十分に尊重しているのでしょうか？

上記のように様々な角度からの今日的議論が必要な問題について、日本司教団の「いのちのまなざし」第二章に立脚せずに乱暴な署名活動をなさるのは即刻やめて下さい。カトリック教会の品位を貶めると強く感じます。



●匿名希望（信徒）

私は、カトリック教会の中絶を罪とする考え方に違和感を感じています。妊娠も中絶も当事者は女性です。望まない妊娠をした女性が、自分の問題として妊娠を考え、選ぶ権利を、誰も奪ってはならないと思います。理由は、以下の通りです。

妊娠は、男性の介入があって初めて成り立つことです。しかし男女の立場は今も平等とは言えません。たとえ非暴力であっても、恋愛の初期段階から妊娠に至るまで、男性が主導で「誘い」、女性が「誘われる」関係性の上にあるのが現状です。断るのも、機嫌を損ねたらどうしようと気を遣う。レイプは言うまでもありません。妊娠が、本来、男女どちらにより一層の責任があるのかは明らかです。

ところが、ひとたび妊娠し、万が一男性がそれを望んでいない場合、責任は全て女性にのしかかり、一人ぼっちで社会から孤立してしまいます。しかも中絶しても、出産しても、それは女性の側のスティグマに繋がってしまうのが現状です。多くの女性が自死にまで追い詰められています。中絶は、そうした女性の最低限の選択肢であり権利だと思います。

教会の教えには、犠牲となることの価値が含まれています。お腹の赤ちゃんのために進んで自分を捧げる母親像は確かに尊いものです。しかし、犠牲的な行為は、神様からの呼びかけへの自由な応え、自発的な選びであるはずで、人から、こうすべき、こうしなければ罪だと押し付けられるものではありません。犠牲の押し付けは差別に由来し、差別を生み出します。私は、カトリック教会の中絶を罪とする考えの背景には、教義を決定する場において、女性が排除されてきた教会の歴史が深く関わっているのではないかと疑っています。

シナピスが同封したチラシにはそうした窮地に立たされた女性にとって脅迫的と言える表現が含まれているように思えます。どうしてここでは男性の責任は一切語られず、見過ごされているのでしょうか。おかしいことだと思います。

シナピスのスタッフはこう考えます

●ビスカルド篤子

読者の皆様からいただいた反論を読み、安易に署名を同封してしまった自分を深く反省しています。

この署名の呼びかけの依頼が回ってきたときには、「母体に深刻な影響を及ぼす」という点から、同封することに同意していました。中絶そのものの是非を問う内容ではないと思っていたからです。

私自身は、もし望まぬ妊娠をして苦しんでいる人に出会ったら、その人に真剣に関りたいし、最終的にその人が決めることを尊重しとことん肯定したい、と思っています。

いずれにしても、今回の署名の呼びかけについて、確かに私は署名呼びかけ文を深く読み込み、「我が事」としてとらえていなかったと思いました。広報編集者の皆さんはいかがでしょうか。

正直なところ、あの署名を回すのには抵抗があったのかどうか、あったけれど、待ったをかけにくくてそのままにされていましたか。もし、シナピス広報会議の席で人と違う自分の思いが自由に発言しにくいのなら、これはとてもよろしくないことです。言い出しにくい空気を感じてらっしゃったとしたら、活動センターの環境を考え直す必要があるかと思います。

話は変わりますが、私はこの署名用紙を同封したことがきっかけとなり、「シナピスニュースで特集を組んで自由な意見を汲み取る機会」が訪れたことをとても歓迎しています。いただいた全ての意見を掲載し、読者にも「自分ごと」としてこの問題を投げかけてともに考え、しっかり議論を深めてゆく良き訪れだと捉えています。

みぎともこ
●右知子

私は、今回この署名で初めて経口中絶薬が母体に与える影響があまりにも大きく危険な薬であるということ、そしてその薬が承認されようとしているのに、あまりにも国民の関心が少ない事を知りました。署名内容は、中絶そのものを問うものではなく、薬が危ない、そして守れるいのち（母子ともに）は守るべきだという趣旨だと理解しました。このような問題があるという事をみんなに知って欲しいという思いでシナピスニュースで取り上げることに賛成しました。

投稿いただいた文章は「経口中絶薬承認反対」に対するご意見というより「中絶」についてのご意見が多いように思いました。この事をきっかけに事務所スタッフ間で「中絶」について思う事を議論しましたが、私たちは「中絶」に無条件に反対しているわけではなく、（いのちを守るのは大前提として）何らかの理由で、中絶せざるを得なかった心痛める人にはむしろ寄り添いたいと思っています。過去に神父様から「いのちへのまなざし」を教材にして学んだ時も、そのように習いました。

カトリックとして議論される事がすくないこの話題を、特集記事を組んで様々なご意見を載せる事で読者の皆さんの意見交換ができる場になれば良いと思います。また、特集を読んでそれに対する意見投稿が寄せられたら、より分かち合いや考えが深まると思います。

シナピスは皆が心地よく楽しめる良いニュースだけを載せる、というスタンスではないと私は思っています。いのちにかかわる、私たちが考えないといけない事は今後も賛否両論あっても取り上げていきたいです。

●やまだ なおこ山田直保子

私は、この署名を見て「こんな薬が出たら簡単におろすことができちゃう！」とびっくりして危機感を覚えました。もちろん色々な妊娠の現実があり、レイプ被害で妊娠してしまった人、妊娠と同時にガンがわかり泣く泣く子どもをあきらめなければいけなかった人、避妊することもなく快楽重視で妊娠し、「あーできてもうたからおーろそっ」といった深く考えない人たちもいますよね。それが現実であり、私はどんな状況でも、周りに流されるのではなく、自分で決めたことに正解不正解はないと思っています。

そしてカトリック的には、中絶反対のスタンスでも、離婚はダメ、中絶はダメ、同性愛はダメなどカトリック的に色々ダメなことはあっても、状況によって中絶せざる得ない人を排除している人もなく、そういう状況の実際の当事者に神父さんは寄り添ってくれますよね。

そして、今の時代は…とか、簡単にカトリックの考えとしてダメな事は変わってほしくありません。

離婚ダメ中絶ダメという教えがある、そのうえで、現実社会で例えば、レイプで妊娠して中絶するのを反対！と誰も言っていないからです。シナピスは中絶を一概に反対するスタンスではないという事が伝わっていないからこれだけ反響を呼んだのだろうなとは思いますが。

命は重い、その事を考える事もしなくなるような気軽な中絶薬は疑問だし、副作用とか怖くないのかなと私自身は単純に思うのですが、この薬によって救われる人もいるんでしょうね。

でも、こうやってたくさんの反響があり、みんなで考えて話し合う機会を神様が作ってくれたんだなあ嬉しく思いました。事務所内でこのことについて話し合えた事もとても良かったです。ニュースで載せるのはもちろんのこと緊急ミーティングという対面で話し合うのもいいですね。

いろんな意見があり、いろんな想いがあり、反対も賛成も全てを受け入れるシナピスでいてほしいな。

ようは議論できる環境は幸せだということです。メールを寄せてくれた方々もふつふつと考えていたことをやっと言えて、シナピスだから言えたってこともあると思います。反対意見も賛成意見もニュースに載せることによって隠すことなく、みんなで議論出来て、違う意見の人も認めあえる優しい世界になりますように。

●かわもとあや川本綾

私はまず、シナピスニュースは「カトリック的に正しい」考えを広めるようとする媒体ではないかと思ながらニュースを作成しています。

私は「カトリックだから中絶に反対」という考え方に賛同してはおりません。

もし中絶を望む女性にとって子宮に器具を入れて胎児を引っ張り出す方法より安全な方法があるのだとしたら、それはむしろいいことなのではないかとも思いました。

でも調べてみたら、経口中絶薬の安全性がまだ十分検証されておらず、認証されている国でも重篤な副作用が出ていて、その頻度をどう解釈したらよいのかなど信頼できる情報が少なすぎることに、今の日本で例えば夜中に大量出血など副作用が出た時に十分な対応ができるかどうか不透明なことがわかり、中絶の是非ではなくこの薬が認可されることについて賛成できないと考えて署名をし、今回の署名を入れることも賛成しました。

ただ、チラシの中の「母が子を殺す」という表現が暴力にもなり得るということに注意深く考えるべきでした。

また、男性の責任が曖昧になっている点はその通りだと思います。でもたとえば男性の同意なく女性の意志ですべてを決めて中絶できたとしてもそれは同じです。中絶自体が女性の心と体に大きな影響を与えるのはどのような方法をとっても同じ。それに加えてどうして安全性がよくわからないバクチみたいな経口中絶薬を服用して女性が自分の命をこれ以上危険にさらさなければならないのでしょうか。娘が妊娠して私たちに相談できずに悩みぬき、よくわからないままネットや何らかの方法で手に入れたこの薬に飛びついてしまったら、と思うとぞっとします。

中絶反対について批判するとき、男性の所有物ではない女性の「性と生殖の自己決定権」という考え方がよく持ち出されます。「産む、産まないは私が決める」という考え方です。もちろん間違っていないと思う。でもひとり一人違う事情を抱えていて「ほんとは産みたいけれど・・・ムリ」という気持ちに対し、「ほんとは」の気持ちや胎児のいのち、その裏の女性が一人で産んで育てることが難しい、個人ではどうしようもない現実には向き合おうとせず、ただスローガンのように「産む、産まないは女性の権利だからあなたが自由に決めていい」と主張するのは違うと思います。実際、選べる自由なんてどこにもないし誰も助けてくれないのに、産む、産まないの責任をその人だけに押し付けて、その人が選んだことを「自己責任、自業自得」と突き放す結果になりかねないからです。

色々な考え方はありますが、いのちは神の領域で、中絶についても賛成・反対と人が二つに分けて言える立場になくてその人によってみな違うし、自分のこととして正解がわからないまま向き合い続けるしかないんじゃないかと思います。今回、私自身、まだ自分ごとになっていないことに気づかされました。

反論をくださった方も、いのちを守りたいという目指すところは同じだと思うので、ニュースを通して、今回、「経口中絶薬の認可に反対」という事柄が、原理主義的な中絶反対や、カトリック内部の性犯罪の隠蔽、そして女性に責任のすべてを押し付けてよしとするような風潮へのすり替えに利用されそうなことや、いのちに向き合うことについて学び合い、自由な意見を交わせたらと思います。

まず、署名を安易に同封したつもりはありませんでした。読者の皆さんとこの経口薬について一緒に考えられたらという思いでした。多くの国はすでに手術より経口薬使用が主流で他国に比べ遅れているとはいえ、世の中でさほど議論されないまま承認に向けて動き始めていること、医師会でも国会でも意見が分かれているにも関わらず承認されようとしてること、また、経口薬が母体に及ぼす影響は、多かれ少なかれ手術と同じようにあることや、副作用によってリスクを一生背負うことにもなりかねないことも知りました。アメリカでは、経口薬では中絶がうまく進まず結局手術にいたり、服用しなければよかったと二重の苦痛により嘆いている女性のことばを目にしました。これまで私自身もこのことについて気にも留めていなかったという反省などあり、署名をニュースに入れる判断をしました。

投稿くださった皆さんがおっしゃるように男性、父親の存在について触れていない点が不足していたことも反省するところです。

私自身、中絶に反対はしてはいません。妊娠に至る経緯や、諸事情により、中絶せざるを得ない状況に追い込まれている女性たちにとって、その選択は必要なことだと考えますし、そうせざるを得なかった知人がいるのでわかります。心身ともに苦しむのは女性ですから。でも胎児のいのちはどうなるのか。これは中絶だけを考えるのではなく、日本の社会における性教育、またジェンダーに対する意識など、私自身もそうですが一人ひとりの意識が低いという問題を考えなければならぬと思いますし、「いのち」に向き合うことをタブーにしてはいけないとあらためて感じています。

投稿者の中にはシナピスの趣旨やニュースの目的などに理解を示してくださっている方もおられますが、色々話すうちにこのことがカトリック教会でもタブー視されてきたこと、司教団のなかでも意見が割れていること、触れたいけれど、議論の場がなかなか設けられないで見えてきました。

シナピスの今年度のテーマ「互いに耳を傾けよう」は、こういった壁を取り壊し、意見を交わすことの大切さを示すものですし、これこそシナピスの役割であると考えます。

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

このことについては皆さんとの分かち合いを続けていきたいと考えています。

どうぞ、ご意見、ご感想をお寄せください。

よろしく願いいたします。



子どもの本で平和をつくる ⑤

たごけいこ
多湖敬子

ある町の図書館に爆弾が落ちて町が燃えてしまい、図書館の本も全てこっぴみじんになってしまいました。こなごなにならなかったのはピーターのお父さんが図書館から借りていた一冊だけ。

やがて敵の軍隊に人々が町から追い出されることになりました。

お父さんは「うちの宝ものをこれに入れて、しっかりまもらなきゃ」と押入れの奥から鉄の箱を出してきました。ピーターは不思議でした。うちには宝物なんかないのに…と。ところが、ピーターのお父さんは図書館の本を厚手の布にくるみ、鉄の箱に収めながら「ぼくらにつながる、むかしの人たちの話がここにかいてある。おばあさんのおばあさんのこと、おじいさんのおじいさんのまえのことまでわかるんだ。ぼくらがどこからきたか、それは金や銀より、もちろん宝石よりだいじだ」と言います。

町の仲間と共に、ピーターとお父さんも故郷を捨てて旅立たなければならなくなりました。それは幾日も続く過酷な旅。やがて、お父さんは衰弱し、帰らぬ人となってしまいます。

ピーターは一人になってしまったけれど、お父さんに託された鉄の箱を抱えながら人々と共に歩き続けます。荷物さえ運ぶのが大変な行程。皆が鉄の箱を置いていけという中、ピーターは鉄の箱（一冊の本）のために自分の荷物を捨ててしまいます。そんなピーターの前に立ちはだかる山々。さすがのピーターも箱を持って山を越えるのは無理だと悟り、山の手前の村はずれのシナノキの根元に鉄の箱を埋めるのでした。

やがて年月が過ぎ、大人になったピーターは箱を掘り出すために村を訪れます。鉄の箱を手にしたピーターは、その中の赤い表紙の本を何度も読んだ後、自分の生まれた町へ持っていき、再建された図書館に本を届けました。

「図書館にあれば、きっと だれかがみつけて よむだろう。なんどもよむだろう。」（「」は本文より）

戦争によって失われる大切なもの、それは「いのち」でしょう。しかし、この絵本で描かれる大切なものは「民族のルーツ」のようです。多くの日本人にはあまり実感のわかないものかも知れません。そう思ったとき、ふとウクライナの国歌を思い出しました。

♪自由のために身も心も捧げよう、今こそソサク民族の血を示す時ぞ！（一部抜粋 worldfolksong.com より）

民族や国の大切なもの、誇りとは何なのか。戦争がすべてを奪っていくなか、大切なものを隠し、守りながら、どうやって後世に引き継いでいくのか。戦争で失われたもの、その中で守ったもの、そういったことを考えさせられる絵本です。

NHK スペシャル「新・ドキュメント太平洋戦争 1942 大日本帝国の分岐点」（2022.8.13 放映）

「開戦前、日本には閉塞感が漂っていた。アメリカの経済政策に苦しむ中、やがて戦争を望むようになっていった。思わぬ敗北に直面した日本。ところが軍とメディアは国民に事実を伝えようとはしなかった。敗北を知らされなかった人々は破滅的な戦争へと突き進んだ。真実から目を背け偽りの物語に身を委ねることはどんな結果を生んだのか、開戦から2年、太平洋戦争の分岐点を見つめる。」（上記ナレーションより）

戦時下のエゴ・ドキュメント（個人の日記や手記など）を掘り起こし、太平洋戦争の最中に人々が何を想い、どう書き記したかを検証したドキュメンタリー。兵士の遺言、学徒兵や市井の人々が書きのこした日記など、エゴ・ドキュメントは後世の人々が時代を見つめる手掛かりになるのだと改めて思いました。日々の思いを何気にかいた日記。のちに貴重な資料となるとは思いもよらなかったことでしょう。今なら膨大なデジタル・データが残されるでしょうね。その人らしい筆跡の紙媒体で残されたドキュメントには深い味わいがありました。

ピーターのお父さんが守ろうとした宝物に匹敵するかも知れません。



この本をかくして

作：マーガレット・ワイルド

絵：フレヤ・ブラックウッド

訳：アーサー・ビナード

出版社：岩崎書店

価格：¥1500+税

子どもたちに 伝えたい平和



「しあわせに生きるためのいのち」

サレジアンシスターズ
かねこ きみこ
金子 君子

「イエス様は死ぬために生まれてきたが、わたしたち人間は生きるために生まれてきた」と繰り返しおっしゃっていた神父様のことを思い出しながら、イエス様の尊い十字架の死がわたしたちにいのちをもたらした神秘を感謝し、いただきたいのちを存分に生き、それも、しあわせに生きることが大事だと常々考えています。それは自分だけでなく、周りの生きとし生けるものが皆、そうでなければ神さまの意図されることには近づきえないと言えます。ちょうど、この原稿のお話を受けたとき、日本カトリック司教団が2020年に実施要綱を発表された「すべてのいのちを守るための月間」について考えていました。日本の司教団は、教皇フランシスコの訪日にこたえて、毎年9月1日から聖フランシスコ・アッシジの祝日である10月4日までを「すべてのいのちを守るための月間」として実施することを打ち出されました。環境問題・エコロジーについては、教皇フランシスコが出された回勅「ラウダート・シ」に詳しく、具体的に書かれています。わたしたちが今生きている地球環境は、悲鳴をあげています。自然環境枯渇、汚染、貧困、紛争、難民、人権、保健衛生、雇用、福祉、教育、ジェンダーなどです。この現実を前にして、わたしたちにできることは小さなことかもしれませんが、その小さなことが大きなうねりになって地球環境保護につながり、次世代によりよい環境を残していくことが実現していくと思われまふ。教皇の「ラウダート・シ」に目を止めてみます。『人は、自己中心的にまた自己完結的になるとき、貪欲さを募らせます。心が空虚であればあるほど、購買と所有と消費の対象を必要とします』(204) まさに、わたしたちが自分の便利さや快適さを優先し、無関心さを生きていくときには、共通善を求めるところか真逆の方向に進むこととなります。それはしあわせな生き方にはならないと思ひます。『わたしたちは、いつも、自分自身から出て他者へと向かうことができる存在です』(208) 『落ち着いた注意深さをもって生活しようとする姿勢、展開を予想したりせずに全身全霊をもって相手と向き合おうとする姿勢、懸命に生きるよう神からいただいた贈りものとして一瞬一瞬を受け止める姿勢』(226) という具体的なことを示して心のあり方を話されます。またライフスタイルの実践についても述べられています。『プラスチックや紙の使用を避けること、水の使用量を減らすこと、ゴミを分別すること、食べられる量だけを調理すること、他の生き物を大切にすること、公共交通機関を利用したりカー・シェアリングをしたりすること、植林をすること、不要な電気を消すこと、…』(211) 使い捨て文化からの脱却は時を待たずにすぐ実践しなければならぬことです。こうした小さな実践を重ねながら、地球環境保護に心を向ける時に、ご自分のいのちを捧げてまでもわたしたちを救われたイエス様の心を生きることにつながると思ひます。また、連帯は活かされているいのちを感じ、感謝し、喜んで、しあわせに生きる術だと思ひます。9月を司教団の提唱にそって環境月間として小さな努力と奉仕を主にお捧げする日々をしたいものです。

視覚障がい者に対する理解

障がい者委員会 内野直幸^{うちのなおよき}

健常者側から視覚障がい者に対する接し方はとても難しく、普通に接していただきたい場合と、配慮をしていただきたい場合があります。

大勢の人が集まって話をするときには健常者側から視覚障がい者に対しては「暑いですね？お元気ですか？」とか「寒いんですけどいかがですか？」などの言葉をかけてくだされば、それだけで視覚障がい者はとても喜びます。それから世間話に発展することが多いです。

また街中や、駅のホームなどでは「どこに行かれるのですか？」とか「何かお手伝いしましょうか？」といった簡単な言葉がけて良いのです。そうすることでコミュニケーションが広がります。

歌を習うときに、点字の楽譜を読めない私は、その曲を録音したテープを聞いて覚えるしかありません。すごく大変ですが、指導される方も大変だと思います。そういう時に私の指導をしてくださる先生は「ゆっくり覚えてね」とおっしゃってくださいます。そういう言葉で私の気持ちが楽になり、歌うことが楽しくなります。また、駅に着いて電車から降りた時に「どこまで行かれるのですか？」と声をかけられましたので私は目的地の場所を申しましたら、その方は私を目的地の近くまで連れて行ってくださいました。とてもうれしかったです。

その一方で辛いこともあります。町を一人で歩いているときに健常者の歩行者が私の白杖に足が引っかかってこちらが悪くないのに健常者の歩行者に「危ないなあ」と怒られ「ごめんなさい」という謝りの言葉もなく立ち去って行ってとても嫌な思いをすることがあります。

またすごいスピードで走ってきた自転車の車輪に白杖が食い込み私の白杖が壊れ歩くことが困難な状況になっているにもかかわらず自転車を運転する健常者は何も言わずに走り去っていくということもよくあります。

悲しい思いをすることもあって、一人で街を歩いているときに知らない健常者が近づいてきて「あなた全く目が見えないのですか？」と聞かれて私は「はい、そうです」と答えると「あなたの両親は大変やねえ」と一言言ってどこかに行ってしまうことがあります。その人はいったい何が言いたかったのでしょうか？なぜ私が見えないから両親が大変なのでしょう。さっぱりわかりません。

また同伴者と外出した先で、その人が席を外した時に「あなた一人になってかわいそうやね。退屈でしょ」と言われることがよくありますが、そのたびに私は「いえ、私は携帯電話でラジオやYouTube生配信を聴いたり、携帯電話のインターネットでいろんなホームページを検索して楽しんでいるのでかわいそうではなく、ちっとも退屈しません」と言います。視覚障がい者は何もできないと思っている健常者も多いのだと思います。

いろいろ言いましたが、以前に比べたら、視覚障がい者に対する理解は相当深まっています。しかしまだまだ理解は十分足りているとは言えません。これからももっと理解を深めていただき、健常者と視覚障がい者がお互いに気持ちよく過ごしていける社会にしていきたいです。

障害を持ち、生きるということ

夙川教会 おかざき ふいき 岡崎 蒔

身体障害者としての生活を振り返ってみると、20年前までは楽しかった思い出と比べると、辛く感じたことや悲しかったことの方が多くあったように感じる。30年前は、車椅子だから特別扱いをされていると思っている人が多くいたように思う。私の性格上、周りがどう言おうと関係ないというスタンスでいたが、それでも心折れることもあった。しかし、教会は私のことを受け入れてくれる場所だった。当時の日曜学校のリーダーは、遠足やキャンプにも連れて行ってくれた。教会の友達は、ありのままの私を受け入れてくれていたように思う。例え平日辛いことがあっても、日曜日になれば教会に行き笑顔になれるということで、信仰心というよりも充電できる場所として教会に行っていたような気がする。

20年前を機に、楽しい思い出の方が多くなったきっかけは、大変お世話になったシスターに「あなたの笑顔は周りの人を元気にできるパワーがあるのよ」と言ってもらってからだ。

その時から、笑顔を忘れず生きていこうと思ったし、ありのままの自分を受け入れてもらったのと同様に私自身もできるだけそのままの「人」や「環境」を受け入れていくことが大切だと思うようになった。

教会の中では小教区・全国の青年活動に参加し取り組んできたし、WYD（ワールドユースデー）や海外巡礼にも参加させてもらった。もちろんできないことや行けない場所があったが、それでもお互いを受け入れていく中で、生まれる信頼関係に助けられたことは数えきれないくらいある。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」正にこの言葉が、自分の生活の中で実ったなと思えるきっかけになったと感じている。

私は今、特例子会社で働いている。様々な障害を理解し、支えあいながら仕事をしている。今尚、「男尊女卑」や「障害者差別」がゼロではない日本。女性の社会進出や障害者への理解もまだまだ足りないように感じる。福祉国家といわれているフィンランドでは、そもそも国として障害者数の統計を取っていないとのこと。現代の日本の社会には様々なジャンルで課題が多くあるように思う。「勉強不足で…」という言葉が聞くことがある。確かに課題を持ち、動いていくとなれば、様々な知見が必要になると思う。しかし一番大切なのは、互いを理解し、受け入れることだと思う。女性であり障害者である私は、何もできないと思われる人もいるのかもしれない。もちろん障害当事者としてできることを率先して実践していくべきだと思う。その中で今以上に、健常者と障害者との共生が実現できることを期待しながら取り組めることを実践していこうと思う。

イエスにならう生き方を求めて

悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、
その悩みを少しでも分かち合うことのできる、
教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著「いのちへのまなざし」
増補新版より

人が善く生きるとは

クラレチアン宣教会司祭 梅崎隆一 うめざきたかいち

ある本に「道徳の授業」という項目があり、こう書かれていました。「1週間に32時間ある授業のうち、この時間だけは『みんな仲良く、助け合って』ということ学ぶ。しかしその他の授業では全く逆の価値を学ぶ」。私たちはミサの中で、「神と隣人を愛しなさい」という、いのちのことばに耳を傾けますが、終わった瞬間、逆の価値観の世界で生きているものだから、全く同じではないかと痛感します。

道徳や倫理を学ぶとは規則や掟を守ることではないそうです。その目的は「人が善く生きるとは何か」を問い続けることだそうです。

そして、より良い法律を生み出すために、私たちは道徳や倫理について探求しなければなりません。ですから「悪法も法なり」などということはありません。法は道徳や倫理を基礎としており、人間が善く生きるための支えにならなければ、その法はどこかおかしいと言えるのではないのでしょうか。

キリストは律法の目的が、神のみ旨を行うこと、それは神と人を愛することである、と教えました。しかしキリストと対立した律法学者は、律法に固執するあまり、神と人をないがしろにしました。

この世に神はおらず人間しか存在しないなら、人間の決め事が最高の正しさになりますから、欲望のままに人を殺すことを最高の正義とすることも可能となります。道徳と倫理は、人間が大好きで、人となり、人の救いのために自らを死に渡した神の存在なしに成立しません。

Human rights (ヒューマンライツ) は「人権」と訳されていますが、実際に意味するところは「人としての正しさ」だそうです。個々人が人生を通して人間らしさを探求することは、保証されるべきであり、国家が道徳の正解を押し付けることは人権侵害であると言えます。

難民について調べると辞書には、「戦火や震災、生活の困窮などで居所を失い(に居られず)安全な地域に逃げてきた人々」と書かれています。全ての人はどんな境遇においても、人間らしく生きることを妨げられてはなりません。

法を規制する日本国憲法の前文には「われらは、平和を維持し、専制と隷従^{れいじゆう}、圧迫と偏狭^{へんきやう}を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」とあります。日本国民が「人間が善く生きるとは何か」という問いを現実の中で生き、人の素晴らしさを示していくことは、人間らしい名誉ある仕事であり、それは神のみ心を生きることとなんら矛盾することではないと確信しています。

共に生かし合う社会をめざして「外国人住民基本法」の制定を

難民移住移動者委員会 担当司祭 松浦 謙

今年の3月25日に日本カトリック司教団が古川禎久^{よしひさ}法務大臣に要請文を送りました。日本で生まれ育ちながら、両親が在留資格を持たないために退去するよう求められている子どもたちに日本に留まる許可を与えてくださいという内容のもので（カトリック新聞 2022年6月5日号参照）当事者のひとりであるS君は「日本で生まれ育つ僕たちが日本で生きることは悪いことなんですか？」とビデオレターで訴えていました。

これは一つの例にすぎません。今日本に住んでいる外国人の中に、困難や生きづらさを抱える人が大勢います。外国にルーツのある子どもたち、技能実習生、在日韓国・朝鮮人、国際結婚をした外国人などです。低賃金労働を強いられたり、就職差別、入居差別、ヘイトスピーチ、また母語での教育を受けられない、自由に渡航できない、政治に参画できない、などです。日本人と同じように税金も払い、働いて社会に貢献しているにもかかわらず、不当な扱いを受けています。枚岡教会では信徒たちが、差別的な扱いを受けているベトナム人家族を、物心両面から支えようと努力しました（時報 2021年12月号参照）。とはいえ、これらの支援にも限界があります。

あるたとえばです。「川上からかごに入れられた赤ちゃんが流されて来た。それを見つけた人がすぐに助けた。けれども次から次へと流されてきて、その数は一向に減らない。そこで上流に行くと赤ちゃんをそうやって捨てる人がいた。この行為をやめさせなければならないことが分かった」のです。



つまり、わたしたちは今、助けを必要とする隣人に手を差し伸べると同時に、その根幹にある制度や差別的な法律を改めなければならないのです。その良い例が、まるで犯罪者のように外国人に指紋押捺を強制する「外国人登録法」でした。キリスト教諸教派が一致して反対運動を進め、2000年4月、この法律を撤廃させました。この取り組みはさらに「外国人住民基本法」を制定する運動へとつながっていきました。それは、国籍を問わず、すべての外国人住民に、人間らしく生きる権利を保障しようというものです。その内容は、「子どもの権利条約」「難民条約」などの国際的な人権法にもうたわれているもので、実は日本も既にこれらに加入しているのです。それにもかかわらず、いまだ法整備に至っていません。

日本カトリック司教協議会は、毎年、「外国人住民基本法」制定のための署名運動を呼びかけています。共に生かし合う日本社会の実現に向けて、今わたしたちができることに取り組みしましょう。

宗教者ネットワーク 第32回死刑廃止セミナー

「是処青山:在日韓国人政治犯が行き着いた所は」

講師:李 哲(イ・ チョル) さん

日時 :2022年7月12日(火)18:30~20:00

会場:カトリック大阪大司教区本部事務局 報告:カトリック門真教会 小野幸治



シナピスは、「死刑を止めよう宗教者ネットワーク」との共催で、在日韓国人で元えん罪死刑囚である李哲さんの講演会を開催しました。会場には31名の参加者とYouTube視聴に30名が参加しました。講演会に先立ち挨拶された酒井司教様は、諸宗教が「席を同じくして、共通のテーマを話すことの意義を強く感じて」いると述べ、「死刑廃止ということに関しては、日本の世論においてはごく少数派であるわけですから、共に力を合わせていくことの意義はかなり強いものがある」ことを強調されました。

講演のなかで李哲さんは、大学のサークル活動の中で民族意識に目覚め、祖国の民主化と統一を韓国の学友と共に行っていたと韓国留学を行ったこと、韓国留学のなかで、軍事独裁政権のスパイ事件捏造に巻き込まれ、13年間の獄中生活を送ったことを話されました。韓国中央情報部の凄惨な拷問を交えた尋問により、スパイの罪を強要され長く獄中生活を送ったことは、民主化された社会が如何に必要なのかを私たちに教えてくれました。

しかしそれにもかかわらず、日本で13もの救援会ができ活発な救援活動が行われたこと、何より家族の献身的支えがあったことが、李哲さんの軍事独裁政権に抗する意志を回復させたことを感動的に講演いただきました。とりわけ僅か3分の面会時間を利用して、オモニ(母親)が李哲さんを叱咤激励する場面は印象的です。また李さんの婚約者の母が、婚約中にカトリック入信を李さんに勧めたのに断られたこと、自分の娘がスパイ事件に巻き込まれ獄中生活を余儀なくされたこと等にも関わらず、李さんの支援活動に献身されたことが語られました。李さんは、カトリック入信の一因として義母の奉仕を挙げています。このことは宣教について、私達が深く学ぶ点だとも思います。

李哲さんは、単に元えん罪政治犯死刑囚というだけでなく、一般死刑囚との交流を通じて、死刑制度の非人間性を描き出します。18歳の死刑囚と交わしたエピソードは、李哲さんの人間性を表すとともに「誰にも生命を奪う権利」ではなく、「誰も、法の名を借りて死刑に処す権利」はないことを私たちに訴えます。

このセミナーは YouTube で公開されています。ぜひとも多くの方がご視聴されることをお願いいたします。 https://www.youtube.com/watch?v=mq4N4_aiSt8

長年に渡り、毎週欠かさず面会ボランティアを続ける塩見真知子さん。塩見さんのように地道に収容された人に面会する人がいなければ拘禁施設で何が起きているのか、誰にも知られないままになります。シナピスは面会ボランティアさんたちを応援し、ともに活動を続けています。

大阪入管面会支援ボランティア報告 COVID-19 パンデミックに関して

しおみま ちこ
塩見真知子

今年4月7日に、日系ペルー人42歳Aさんにコロナ陽性反応が確認された旨、外部病院から入管に一報が入り、その直後から面会が全面禁止になりました。Aさんは屋上でサッカー中に怪我をして病院へ行き、偶然陽性が判明しました。その日被収容者の抗原検査が行われ、結果は全員陰性でした。しかし2日後から次々と感染者が出て、クラスターが発生し、5月16日まで面会禁止が継続されました。

この間差し入れは可能でしたので、安否確認のために見舞状と返信用の葉書を十数枚差し入れました。確かな感染源は不明ながら、誰もが職員が感染源だと断言し、職員への不満を募らせ、ブロック内のストレスがかなり高じていました。新規被収容者は2週間コロナ感染対策で隔離され、PCR検査で陰性を確認後、収容ブロックへ移されるので、彼らが感染源になる余地はほとんどありません。

感染しても無症状の人、軽症で済んだ人は不幸中の幸いでしたが、重症化して肺炎に至った人は実に悲惨でした。Jさんは、4月9日に高熱を発生し外部の病院で受診しました。医師が入院を薦めたのにも拘わらず、入管は点滴後に再収容し隔離しました。その後Jさんは憩室炎も併発し、腹痛に耐え切れずに何度も呼び出しベルを押しましたが誰も来ず、来ても防護服に身を固めた職員が遠目に覗き見るだけ(生きているか確認するためだと、後日Jさん曰く)で、検温すらしなかったらしいです。

入管には24時間医療従事者が常駐していないため、病人に対して適切な経過観察も無く、また必要な食事療法もありません。その結果症状が悪化したり、副次的な病状が顕われることがあります。身柄拘束者は、被拘束者の健康管理について全責任がありますが、入管はこの点に関し30%程度しか実施していない気がします。さらに、外部の医療機関を受診した場合、患者本人が医師と直接話(自動翻訳器等使用し)すことが禁じられ、入管職員と医師の間でのみしか会話できない点が最大の問題です。

Jさんは結局1ヶ月半ほど隔離され精神的にも非常に危うくなり、「ここで死んでもいい」という思いが何度も過ったそうです。彼は、陰性になり大阪市保健所から養生解除通知が出された後も、入管基準で2週間程延長され隔離されていました。その半月間のJさんの苦悩は拷問にも値すると思います。

7月22日に、今度は入管職員が感染しA/Bブロックが面会禁止になりました。被収容者の抗原検査は全員陰性でしたが、前回の件があり被収容者に対する処遇が厳しくなりました。4人部屋の収容室からは、シャワー・洗濯以外は出られず、食事も室内で摂ることになり、ブロック内はストレスの塊になったらしいです。8月2日には、一旦面会解禁になりましたが、被収容者2人が感染したため、2日後にまたもや全面禁止になります。今回は感染源が入管職員であることが明らかだったため、ブロック内は爆発寸前のストレスだったと後日聞きました。各職員は出勤前に簡易抗原検査をするそうですが、誰が感染してもおかしくない現状では焼け石に水です。

以上の状況から、収容されている方々の人権を考慮し、COVID-19第1波の時のように、速やかに仮放免を許可する要望書を出しました。



シナピスホーム便り



やまだ なおこ
山田 直保子

皆さま、こんにちは。毎日毎日酷暑の中、どうお過ごしでしょうか？
シナピスホームカフェは毎週水曜日と月に一回土曜日に開催していますが、コロナ禍にも負けず、たくさんのお客様に来て頂いています。少しずつ定着していったカフェですが、最近ありがたい事に清掃奉仕などでお声がかかり、多い時では6人くらいいた難民移住者が2人くらいの時もあって、お客様にもよく「あの人はどうしたの？」と聞かれます。生活を丸抱えしているシナピスとしては、とても助かるので優先的に清掃奉仕等に行ってもらっていますが、お客様は寂しいのかもしれないね。

そんな中、とても頑張ってくれている難民移住者がいて、今回はその方(国籍、性別は特定を避ける為伏せます)にスポットをあてたいと思います。



その方を仮にBさんとします。Bさんは入管に収容されてから、辛い思いばかりしてきました。私はBさんの話を聞いて、泣いても笑っても何も変わらない、身が引き裂かれる悲しみっていうものを感じました。心が無になり何も感じ取れない、心に蓋をすることでどうにか生きているといった状況でした。

仮放免で社会にでてきてからも、就労禁止のため、辛い生活でした。縁あってシナピスで支援するようになってから、少しずつ安定してきた生活に笑顔も増えてはきたものの、裁判のつらい事に押しつぶされそうになっても、生活していかなければいけない事に疲れ切っていました。日本からいらない人とされ、毎月一回の入管の出頭日には早く帰国しなさいと言われ、自分の存在価値が見いだせず、トラブルがあっても自分の感情を押し殺し「いいよ、自分が我慢すればいいだけだ」と諦めてしまっていました。

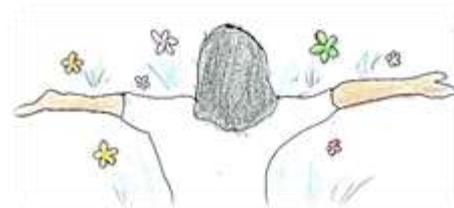
ホームができた当時、カフェを開催する時に、Bさんも手伝ってくれました。私と出逢った当時、まだ私の事を全く信用していない目で挨拶程度の会話しかせず、他の難民移住者ともそんなに交流はしていませんでした。とってもシャイで恥ずかしがりやなので、自分から話しかけるといったこともなく、淡々と作業してくれている感じです。

ホーム開設後一か月で私の病気やコロナの影響でカフェを閉鎖しました。再開後、Bさんはだんだん変わっていきました。まだそんなに信頼関係を構築できていない私をととても心配してくれて、私の手足になって動こう動こうとしてくれたり、カフェを盛り上げるための提案を数多くしてくれたり。色んな話をしたり、冗談を言い合って笑ったり(内容はとてもしょうもない事です。でもそれが重要なのです)様々な出来事に一緒に向き合ったり。そんな事が続くうちにBさんはどんどん変わっていきました。

私の怒っている事に一緒に怒ってくれたり、体調を心配してくれたり、いつの間にか、私自身が助けられていることが多くなりました。

「あんた誰？」の目から「家族だから」の温かい目に私は守られていることに気づいたのです。そういう関係性になってから、Bさんは「必要とされる喜び」を実感してくれるようになっていき、どんどん輝いていきます。

カフェで実際に料理を誉めてもらったり、自分が作った工房の商品と一緒に販売しにいたり、直接みなさんからの喜びの声をお聞きするようになる機会が増え、どんどん自信をつけていってくれました。



以前のBさんでは考えられない事です。表に出ることにとっても警戒していたからです。

そしてこんなことが起きました。

春くらいには血圧異常と不整脈、徐脈が続き、私はとても心配しました。胸が痛いなどの症状の訴えはなかったのですが、心臓は怖いので、病院の段取りをして、症状を言うと「入院になると思う。ペースメーカーを入れないといけないレベルだ」と言われ、夏の暑い中、付き添いました。すると、全く異常なしだったのです。あんなに徐脈で脈が飛んでたのに???とびっくりして、私は「神様って本当にやってくれるな!」と感動してしまいました。

たまたまかもしれないし、これからも経過観察はしていきますが本当に神がそばにいて下さると実感できたのです。

Bさんがいきいきと明るくなり誰とも笑顔で話している姿を見て「必要とされる喜び」を体現しているようです。私は嬉しくて、ぜひこのことを読者の皆さんにお伝えしなければと思って書きました。

神様と難民移住者と共に私ももっともっと頑張らなければと身が引き締まる思いです。

ぜひカフェに遊びに来て下さいね。



カフェ閉店後にバイタル測定!



8月の祈りの集い



大阪大所教区司教館ディスプレイ

シナピス主催第11回「祈りの集い平和旬間に祈る」を8月11日に行いました。

日本のカトリック教会では広島に原爆が投下された8月6日から9日の長崎に原爆が投下された日をはさみ、15日の敗戦の日までの10日間を平和旬間と定め、特にともに平和を祈り、平和を考え、平和について語り、平和のために行動する期間としています。

今回の集いでは、1981年2月25日に教皇ヨハネ・パウロ二世が「平和の使者」として広島を訪れ、日本国内外に発信したメッセージ「平和アピール」を読み深め、広島教区司祭服部大介神父からメッセー

ジを頂きました。

服部神父はメッセージでご自身のご家族が被爆者であるとお話くださり、「人を大切に自分を分かち合うことをしっかり生きることが平和に繋がる。平和を語る人と平和を宣教する人はちがう。ここでの平和を語る人とは、時々平和について話すことで、自分の生涯をかけて平和を語る人が平和を宣教する人であり、被爆者たちが正にそういう人たちではないか」とお話しくださいました。

自分たちは平和を語るだけの人でいいのか、平和を宣教する人であるべきであり、それを実行するためにはどうしたらいいのかと考えさせられました。また、今から41年前に発信された教皇ヨハネ・パウロ二世の「平和アピール」は今読んでも全く古くなく、戦争や紛争が続く現在に最も相応しい内容とさえ思えました。参加者みんなで世界平和を願い、戦争について考え祈る事ができた平和旬間ならではの集いになりました。

最後に先月に続き大阪明星学園グリークラブの生徒さんたちが歌う「いつくしみふかき」を聴き、それぞれが平和についての思いを巡らせました。

次回は9月8日(木)20時半～
テーマは「いのちに向き合う」

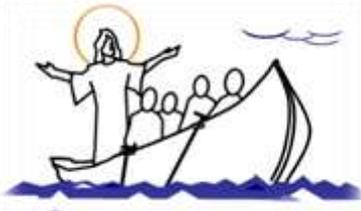
参加は下記 Zoom ID&パスコードを入力

または、QRコードからお願いします。

ID: 761 071 2034

パスコード: 123456





投稿欄 ガリラヤの風

平和を築き、命を守る社会を — 「慰霊」と「戦争体験から平和を学ぶ」 —

カトリック仁川教会信徒

どきや かよこ
土器屋 香代子

8月20日（土）の午後、仁川教会のフランシス館に於いて、表題の学習講演会を行いました。主催は、30年にわたって平和活動のために精力的に活動されてきた「甲東平和を考える会」（以後、「甲東平和の会」と表示）で、長年の功績と信頼で、西宮市と宝塚市の「後援」をいただきました。主催者は近隣のプロテスタント教会にチラシを配ったり、私の友人は阪神地区のカトリック教会にチラシを運んでくださったり、多くの方の働きでこの日を迎えることができました。

「教会の方と一緒に学習したい」という「甲東平和の会」からのお申し出があり、教会が会場となりましたが、コロナ感染状況が真夏まで続くことは予想外のことで、講演会が実施できるのか、直前まで不安でした。しかし、主催者の熱意と仁川教会のご理解、そしてシナピススタッフのご支援のおかげで、会場いっぱいに集まってくださった多くの方から「本当に良い学習会だった！」の声をいただくことができました。

I部は、「藤子16歳の夏」のタイトルで、西宮市原爆被害者の会の会長・武居さんご夫妻が広島での被爆体験を語られ、奥様の姉藤子さん（16歳）の死を通して、原爆の悲惨さと核兵器の放棄を訴えました。

II部は、「戦没画学生慰霊美術館『無言館』の作品から考える」のテーマで、17年前から「無言館」と関わりのある私がお話しさせていただきました。

「無言館」は、25年前に開館され、主にアジア太平洋戦争で亡くなった画学生の遺作や家族にあてた手紙などが展示されています。画学生の生きた証である絵は、長い年月を経て傷みがひどく、「無言館」で修復されています。修復によって、命の輝きを取り戻した作品から、彼らの人生を奪った戦争の残酷さを感じ、二度と戦争をしないという決意をしなければ彼らに申し訳ないと思います。作品にまつわるエピソードから、家族・恋人・故郷への愛が伝わってきて、「戦争は、国のために兵士の命・才能を奪うだけでなく、長年家族を苦しめる」ことを感じていただけたと思います。

最後に、画学生・芳賀準録さんのご遺族が、召集令状が届いた時のことや、戦死した時の思い出を語って、「平和憲法の大切さと武器を捨てることこそが平和への道」であると話されました。

会場入口に置かれた「無言館 絵繕い募金」箱には、22,970円が寄せられ、早速「無言館」に送金させていただきました。ご協力いただきました皆さまに、心より感謝いたします。

みんなのけいじばん

急募!

ボランティア募集



・運転ボランティア

荷物の運搬や移住者の送迎などのお手伝い
※車は活動センターで手配いたします



・付き添いボランティア

移住者と役所や病院へ同行し、手続きのお手伝い

※ご協力頂ける方はシナピスまで

▶▶▶ TEL06-6942-1784 FAX 06-6920-2203 Email sinapis@osaka.catholic.jp



インターナショナルデー ボランティア募集中!!

今年は3年ぶりにインターナショナルデー交流会が開催されます。準備会では、新型コロナウイルス感染対策を講じ、規模を縮小して行おうと考えています。当日、安全に交流会を楽しんで頂けるようお手伝いをしてくださるボランティアの方を募集します。

- ◆日時: 10月16日(日)11:00~16:30(数時間のお手伝いだけでも大丈夫です)
- ◆内容: 来場者案内・誘導、会場消毒作業、会場設営撤収作業 など
- ◆連絡先: インターナショナルデー準備会事務局

TEL 6942-1784 FAX06-6920-2203

Email sinapis@osaka.catholic.jp

お問合せお待ちしております。

2021年正義と平和大阪大会 分科会録画(動画)限定公開!!



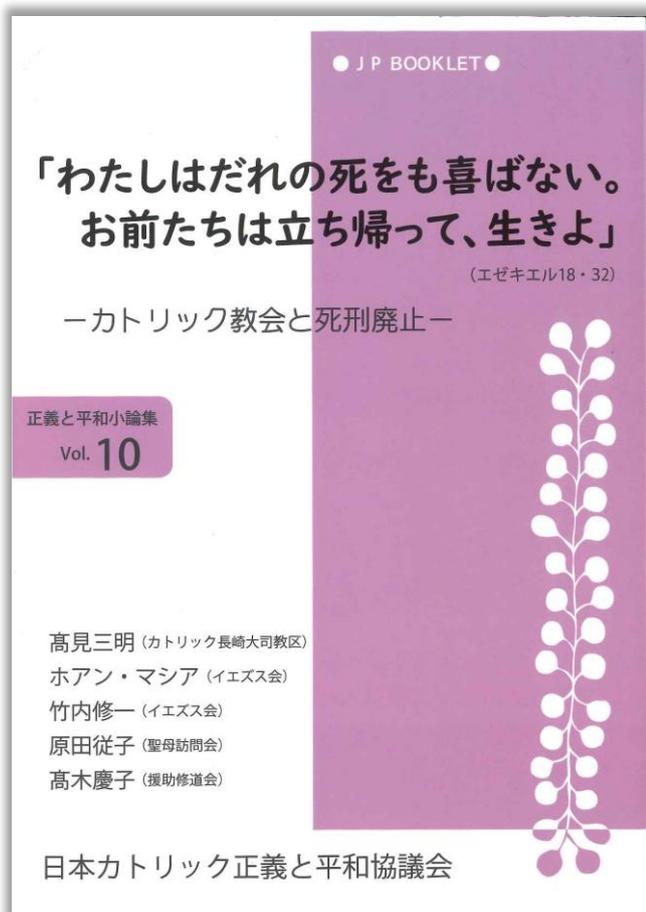
昨年行われた正義と平和大阪大会の分科会の録画(動画)を編集したものの13分科会分を限定公開します。

著作権に抵触する部分や個人情報保護に抵触する部分は削除・編集しています。その他も準備完了後、順次公開をしていきます。教会のグループ学習等でご活用ください。

視聴方法や申し込みは右記QRコードを読んでください。



日本カトリック正義と平和協議会から小冊子のご案内



◆『「わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」(エゼキエル 18・32) ーカトリック教会と死刑廃止ー』

教皇フランシスコは就任以来、折に触れて世界に対して死刑廃止を強く訴えてきました。それは『カトリック教会のカテキズム』の改訂(2267番)や、回勅『兄弟の皆さん』(263番)にも結実しています。そうした現代カトリック教会の思想を受け、いまだに死刑制度を有する日本において、死刑の問題点をキリスト教的観点から考察する論考をまとめたブックレットを発行いたしました。

(日本カトリック正義と平和協議会事務局注文書文章抜粋)

◆『「復興」と20ミリシーベルト ともに暮らす家(=地球)を大切にするために』

福島第一原発事故から10年余り。「復興」という目標の陰で見えなくされたものはないか、ほんとうの「復興」とはなにか、みんなで考えるきっかけになるために…(表紙より) 最新リーフレット配布中

▶▶問い合わせ・注文

日本カトリック正義と平和協議会 事務局

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 TEL06-5632-4444 FAX03-5632-7920

※注文は同封の注文書をご利用ください。

また小冊子は1冊150円の制作実費カンパと郵送料が必要になります。

<訂正>8月号に同封いたしました
「幣原喜重郎生誕 150周年記念 平和への願い」
チラシに訂正箇所があります。

▶裏面◀



2行目 (誤)大正 3年
→(正)大正 13年
7行目 (誤)昭和 25年 10月
→(正)昭和 20年 10月
8行目 (誤)昭和 26年 1月 24日
→(正)昭和 21年 1月 24日

シナピス

公式 LINE アカウントでは、
さまざまなお知らせや情報を
発信しています。右記 QR コ
ードから追加してください。



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp>

活動へのご支援ご協力

よろしくお願いたします。

郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

難民移住移動者支援もよろしくお願いたします。



支援物資提供のお願い

米、缶詰、ハラル食品、レトルト食品

テレフォンカード、不織布マスク

お電話をお待ちしています!!

☎06-6942-1784

あとがき

シナピスでは先月から、毎週の会議の後で聖書の分かち合いをはじめました。特に気になった箇所となぜそこを選んだのかを分かち合います。夕方近くになるので小腹も減る時間なので、お茶とお菓子をいただきながらリラックスした雰囲気でも、みことばを味わいます。悩み、行き詰まり助けを求める人に出会い、まさに「いのち」と向き合うことが多い私たち自身も、日々の疲れやそれぞれが抱えているものもあって頭も心も渴きそうになります。「是非! やりたい」と懇願し実現したこの時間、互いのことばに耳を傾け、聴くことで、気づかされるが多く、栄養ドリンクのようです。

今月のニュースもさまざまな「いのち」がちりばめられています。皆さまとも分かち合いを深めたいと願います。(H)

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆カトリック中央協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 1 3 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ ～互いに耳を傾けよう～

シナピスの風

*掲載行事はコロナ感染症の影響で延期または中止になることがあります。ご参加の際は連絡先にお問い合わせください。 第152号 2022年9月4日発行

9月の祈り

核兵器の全面的廃絶のための国際デーによせて

天の父よ、
あなたの多くの子どもが犠牲となったことを
思い起こし、8月6日に広島に集った人々に、
国連事務総長は、現在、世界で核兵器は
1万3千発、存在していると訴えました。
わたしは、怖くなると同時に考えさせられました。
自分を守るとは何か。国を守るために何が必要か。
確かに、それは武器ではないと確信しています。
イエスはこういう道を選ばなかったのです。
自分を、国を守る唯一の道は、
他の人々を尊敬し愛することだと信じています。
ただ、天の父よ、わたしは笑われて、
これが非現実的だと言われます。
わたしは、負けそうです。
天の父よ、わたしの心を照らしてください。
イエスが歩まれた道を、確信をもって、
歩む力をわたしに与えてください。
これは本当の平和を築く唯一の道です。
アーメン。

シナピスでは、毎月のお祈りをニュースレターとともにお送りしております。
教会で、ご家庭で、日々のお祈りにお使いください。
シナピスのホームページからも、ダウンロードしていただけます。

カトリック HIV/AIDS デスク 「まず知ることから」HIV/エイズ 支援現場からのメッセージ

日時:2022年10月1日 13:00~16:00

講師:生島 嗣さん(認定 NPO 法人がれいす東京代表)

定員:先着50名 参加費:無料 会場:東京カテドラル(関口会館)

※対面および Zoom での配信を予定

◆お問合せ・お申込み◆9/15迄に FAX か EMAIL でご連絡ください
カトリック中央協議会 社会福音化推進部 HIV/AIDS デスク事務局
FAX03-5632-7920 Email: hiv aids@ebei.catholic.jp

日本カトリック正義と平和協議会 小冊子のご案内

- ◆『「わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」(エゼキエル 18・32) -カトリック教会と死刑廃止-』
- ◆『「復興」と20ミリシーベルト ともに暮らす家(=地球)を大切にするために』



◆注文・問い合わせ◆

日本カトリック正義と平和協議会 事務局
TEL03-5632-4444 FAX03-5632-7920
Email: jccjp@cbcj.catholic.jp

※小論集は1冊150円の製作費実費とカンパと送料負担が必要です

オンライン祈りの集い ～世界平和のために祈る～

テーマ: 「いのちと向き合う」

9月8日(木)20時半~(30分)

Zoom ID&パスコード(100名まで参加可)

ミーティング ID: 761 071 2034 パスコード: 123456



2021年正義と平和大阪大会 分科会録画(動画)限定公開!!



分科会について編集後の録画(動画)を限定公開します。著作権に抵触する部分や個人情報保護に抵触する部分は削除・編集しています。その他も準備完了後、順次公開をしていきます。教会のグループ学習等でご活用ください。

視聴方法や申し込みはこちら

カトリック大阪教区ホームページ内「正義と平和大阪大会」をクリックしてください。



シナピスカフェ

★毎週水曜日 13時ごろ~16時ごろ

9月の開催: 7・14・21・28

★月1回土曜日 11時ごろ~16時ごろ

9月の開催: 17日(土)

シナピスホーム: 生野区中川6丁目6-23

☎: 080-8940-8847



ボランティアさん募集中

- ★運転(送迎や荷物の運搬)
- ★同行支援(役所や病院への付き添い)
- ★インターナショナルデー 10/16(日)
(会場設営撤収・来場者誘導
会場消毒・ゴミ回収 など)
シナピスまでご連絡をください
お待ちしております!



シナピス公式LINEができました!

さまざまなお知らせや情報を発信!
友達追加は下記QRコードから



支援のお願い

おかげさまでパスタ、体温計は沢山のご寄付をいただきました。
日持ちのする食品、ハラル食品、不織布マスク、米などのご支援をお願いいたします。



カトリック大阪大司教区 社会活動センター シナピス
Tel 06-6942-1784 Fax 06-6920-2203
URL: <https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「点訳版」「音訳」
ご希望の方はシナピスまで
お申込み下さい。



忘れない あきらめないカレンダー



どんな状況下でも、忘れず、あきらめず、希望をもって歩む皆さまに、情報を配信します。

2022年 9月 の 案 内

★印 カトリック関係

2022年 祈祷の信徒 祈りの意向 9月

教皇の意向：死刑廃止

人間の尊厳を侵害している死刑制度が、すべての国で法的に廃止されますように。

日本の教会の意向：高齢者

高齢者が、社会でも、教会の中でも、それぞれの役割を通して、生き生きと生活できますように。

1	木	●戦争・平和・難民&愛と償いの絵画展 ■場所：兵庫県立原田の森ギャラリー本館2階大展示室 10時～18時(入場は17時半まで) 入場料 大人1000円・大学院生以下無料 チケットは事前に要予約購入 事前予約先：FAX078-412-2228 主催：「一九四六」神戸展実行委員会 ※8月31日～9月4日まで開催 最終日は15時閉場
2	金	●「国葬」反対！豊中市民集会 ■場所：生活情報センターくらしかん 18時半～ 資料代500円 主催：戦争法廃止！豊中市民アクション 連絡先：TEL 090-4033-1376
3	土	●森友事件は未解決！デモ ■場所：野田中央第2公園 11時40分デモ出発 阪急庄内駅まで12時20分頃解散 主催：「森友学園疑獄」を許すな！実行委員会 連絡先：FAX 06-6304-8431
5	月	国際チャリティー・デー
6	火	●戦争あかん！ロックアクション御堂筋デモ ■場所：新町北公園 18時半集合 19時10分デモ出発 主催：戦争あかん！ロックアクション 連絡先：TEL 090-5063-0073 (平日16時半以降、土日午後)
7	水	青空のためのきれいな空気の国際デー
8	木	国際識字デー [UNESCO] ★シナピス主催 オンライン「祈りの集い～世界平和のために祈る～」Zoom(100名まで) 20時半～30分 ID 761 071 2034 パスコード123456
9	金	教育を攻撃から守るための国際デー ●やめろ！安倍国葬 緊急集会～闘いの中で私たちは訴える！ ■場所：エルおおさか・南館5階ホール 資料代500円 主催：やめろ！安倍国葬 実行委員会 連絡先：Email abekokusoyamero2022@gmail.com
10	土	世界自殺防止デー ●ドキュメンタリーを視て語るつどい ■場所：大阪市立北区民センター 18時「忘れゆく戦場～ミャンマー泥沼の背景」(NHKスペシャル)「靈感商法規制進め背景 政治の力の影響は」(報道1930)、「新型コロナ第6波全国最多死者大阪で何が」(かんさい熱視線)主催：映像で現代を語る会 問い合わせ先：TEL 090-5151-9763 (中森) ●わだつみ会 オンライン連続講座 13時半～16時 講座：日本の平和博物館の歴史と現状～日本の15年戦争を中心に 講師：山辺昌彦さん(日本戦没学生記念会副理事長) 参加申し込み先：Email noborun2@amail.plala.or.jp 主催：日本戦没学生記念会(わだつみ会) 連絡先：TEL 090-3161-8677
11	日	●9・11アイヌ民族の遺骨を返せ！関西集会 ■場所：エルおおさか 701 14時～17時(開場13時半) 講師：宇佐照代さん(アイヌ文化伝承者) 資料代800円(経済的に厳しい方は受付でご相談ください) 主催：9・11アイヌ民族の遺骨を返せ！関西集会 実行委員会 連絡先：ピリカ全国実・関西 TEL・FAX 06-6304-8431
12	月	国連南南協力デー
14	水	●琉球遺骨返還請求訴訟 大阪高裁・控訴審第1回弁論 ■場所：大阪高等裁判所202号法廷 10時半～(9時半より入廷) 報告集会：大阪弁護士会館920号 主催：琉球遺骨返還請求訴訟全国連絡会
15	木	国際民主主義デー ●原発賠償関西訴訟口頭弁論期日 ■場所：大阪地方裁判所本館または別館前 13時集合 14時開廷(当日傍聴券抽選締め切りあり) 問い合わせ：原発賠償関西訴訟の応援団★KANSAIサポーターズ TEL 070-5658-9566
16	金	オゾン層保護のための国際デー
17	土	患者の安全のための世界デー
18	日	平等な賃金の国際デー

19	月	●安倍元首相の国葬反対！大阪集会 ■場所：PLP会館大阪・5階大集会室 13時半開場 14時開始 集会後16時～17時デモ 資料代500円 講師：高作正博さん（関西大学法学部教授）「国葬は私たちに何を問うているか」 主催：とめよう改憲！おおさかネットワーク、関西共同行動、しないさせない戦争協力関西ネットワーク、平和と民主主義をめざす 全国交歓会」、戦争あかん！ロックアクション 協賛：おおさか総がかり行動実行委員会 連絡先：TEL 06-6364-0123 中北法律事務所
21	水	国際平和デー
23	金	手話言語の国際デー
24	土	●日中国交正常化50周年記念・中国文化財返還運動大阪集会 ■場所：難波市民学習センターOCAT4階 13時～ 資料代1000円 講演：浅井基文さん(元外交官) 主催：日中国交正常化50周年記念・中国文化財返還運動大阪集会実行委員会 「アジアから 問われる日本の戦争」展2022アフター企画 問合せ：TEL 090-4640-7638(伊関) ●日本弁護士連合会人権用語大会プレシンポジウム「デジタル社会と人権」 ■場所：兵庫県弁護士会館4階講堂（Zoom参加あり） 13時半～16時半 参加費無料 主催：兵庫県弁護士会 問合せ：TEL 078-341-7061 https://ws.formzu.net/dist/S37546121/ ●コリマイ研第216回月例研究会「戦前朝鮮における靖国遺児参拝」講師：松岡勲（立命館大学元非常勤講師） ■場所：猪飼野セツパラム文庫 17時半～19時半 大人800円・会員600円・学生以下無料(要予約) 主催：コリマイ研究会 問合せ：masipon@nifty.com
25	日	●戦時性暴力をテーマにした芝居「あの少女の隣に」 ■場所：スペースふうら13時半開場 14時開演 チケット要予約 当日前売共2000円 申込先：TEL 090-1223-7120(平日12時～18時) Email 2022fuura@gmail.com 主催：「あの少女・木村さん」関西上演実行委員会 ●映画上映会「南京！南京！」14時～16時半 13時半開場 ■場所：ドーンセンター5階特別会議室 入場料800円(学生・障がい者無料) 主催：南京大虐殺60ヵ年・大阪 連絡先：TEL 080-3822-0404
26	月	●9・26 安倍国葬反対デモ ■場所：中之島女性像前 18時半～ 主催：大阪総がかり行動
27	火	●「やめろ！安倍国葬」デモ ■場所：中之島・水上ステージ前 13時半集合 14時半開始 主催：やめろ！安倍国葬実行委員会 連絡先：Email abekokusoyamero2022@gmail.com
28	水	情報へのユニバーサル・アクセスのための国際デー [UNESCO]
29	木	世界海事デー [IMO] 食料のロスと廃棄に関する啓発の国際デー
30	金	国際翻訳デー

メモ

